

2号、2000年)、篠崎恵昭・清水寛「国立療養所長島愛生園のハンセン病児の精神生活の深層—“愛生人”構想からみた『望ヶ丘の子供たち』(1941年)・『愛生』誌の検討—(『埼玉大学紀要教育学部(人文・社会科学)』第50巻第1号、2001年)、清水寛・平田勝政「自主シンポジウム19:ハンセン病療養所における子どもたちの生活・教育・人権の歴史と未来への教訓[Ⅲ]—国立療養所長島愛生園を中心に—(日本特殊教育学会編『特殊教育学研究』第38巻第5号、2001年)、清水寛(研究代表者)『日本及び旧植民地朝鮮・台湾におけるハンセン病児童の生活と教育と人権の歴史』(平成10~12年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告[課題番号10610231]、2001年)、清水寛「国による人間の尊厳と共生の蹂躪—ハンセン病問題が教育学に問いかけてやまぬもの—(『人間の尊厳と共生』の教育研究)2000~01年度日本教育学会・課題研究報告書、2002年)、篠崎恵昭・清水寛「ハンセン病療養所における生活記録運動の意義—堀田善衛・永丘智郎編『深い淵から—らい患者生活記録—』(1956年)の検討を通して—(『埼玉大学紀要教育学部(人文・社会科学I)』第51巻第1号、2002年)である。

清水氏が指摘するように、それまで「日本のハンセン病児問題史を直接の研究対象とした、あるいはこれを研究テーマとした総合的・通史的研究は未だなされていない」というのが実情であり、全患協編『全患協運動史』や藤楓協会編『創立三十周年誌』といったハンセン病関係者が記した著作の中に記載がある程度であった。

1998年から日本特殊教育学会において、多磨全生園、栗生楽泉園、長島愛生園を中心にした共同研究「ハンセン病療養所における子どもたちの生活・教育・人権の歴史と未来への教訓」が連続的に取り上げられた。話題提供者(あるいは指定討論者)として在園者や元入園者の方々が参加・発言する機会をもつに至ったことは大きな成果であった。しかし、「自主シンポジウム」という枠を超えて、「特殊教育」の問題として学会全体において検討され、成果が十分に定着するまでには至っていない。それだけ、ハンセン病の子どもたちに関する研究は、「特殊」な分野の問題としてしか扱われてこなかったといえる。

歴史学の分野から「ハンセン病と子どもたち」の研究をまとめたかたちで取り上げたのは、滝尾英二『近代日本のハンセン病と子どもたち・考』(広島青丘文庫、2000年)である。植民地朝鮮の問題を軸に置きつつ、療養所の子どもたち、新良田教室、「未感染児童」等について、丹念な史料分析を通して問題をえぐり出した。藤野豊『いのちの近代史—「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者—』(かもがわ出版、2001年)、藤野豊編『近現代日本ハンセン病問題資料集成(戦後編)』(不二出版、2003年)でも「竜田寮児童通学拒否事件」が取り上げられている。

いくつかの分野で研究が進められてきているものの、教育学の分野では1990年代まで研究されてこなかったことは、教育学の責任として大きな問題があるといわざるを得ない。国会(参議院文部委員会)でも取り上げられた龍田寮児童の共学拒否問題や、病気の子どものための高校進学・進路保障という問題が、民主的な教育研究団体においてさえほとんど取り上げられることなく、忘却されてきたのである。教育学にかかわる人々が、ハンセン病にかかわる子どもたちの問題を教育(学)の問題として引き受けようとしてこなかったのか、引き受けられなかったのかは、引き続き検証されなければならない。

第十三 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(2)

2) 「教育実践」のとりくみ

ハンセン病(者)への差別・偏見といった認識の問題を考えると、先述した教科書記述の問題とも関わって、教育の持つ意味は大きい。

1983年以降、数年間にわたって大学のゼミで合宿をしながら聞き書きを行い、ハンセン病療養所で「在日」のハンセン病患者(回復者)として生きることを考え続けたグループがあった。その成果をまとめたのが、立教大学史学科山田ゼミナール編『行きぬいた証に—ハンセン病療養所多磨全生園朝鮮人・韓国人の記録—』(緑陰書房、1989年)であった。これは、大学教育の一つのかたちとして、ハンセン病に対する偏見という問題にとどまらず、民族や歴史や国家、そして生きることの問題を考えるものであった。

このほか、大学のゼミを通して「ハンセン病児問題史」をめぐる問題に取り組んだのが、清水寛編・埼玉大学障害児教育史ゼミナール集団著『ハンセン病療養所における子どもたちの生活・教育・人権の歴史—国立療養所多磨全生園を中心に—』(1997年度埼玉大学教育学部「障害児教育史演習」報告集・第1集、1999年)、同『ハンセン病療養所における子どもたちの生活・教育・人権の歴史—国立療養所栗生楽泉園を中心に—』(1998年度埼玉大学教育学部「障害児教育史演習」報告集・第2集、2001年)であった。

長島愛生園へのフィールドワーク(交流合宿学習会)での聞き取りや感想などをまとめた報告集・盈進高等学校同和教育部編『手と手から—ハンセン病療養所の方々との出会い—』(盈進高等学校、1998年)に代表されるように、全国各地でハンセン病を通じた学習活動が展開されてきている。こうした中で、梅野正信・采女博文編著『実践ハンセン病の授業』(エイデル研究所、2002年)は、副題に「『判決文』を徹底活用」とあるように、判決文前文の教材化を通して小中学校の教師たちとの学習会や授業実践を経てまとめられた。内容は理論編と授業編、教材資料に分かれ、理論編では「ハンセン病訴訟判決文を学ぶ」「判決文を読み解く—法的判断力を養う—」、授業編では「導入で元患者の心の痛みを共有する」(小学校)、「導入で子どもの興味関心を高める」、「発表学習で認識を深める」、「調べ学習で子ども自ら追及する」(中学校)、「人権問題を考える契機として」(高校)、その他、ハンセン病問題を学ぶ上での多彩なコラムや資料が盛り込まれている。

『ハンセン病をどう教えるか』(解放出版社、2003年)も、「ハンセン病の歴史を知ろう—古代・中世・近世」、「ハンセン病の歴史を知ろう—近代以降」、「人間回復への道のり」、「ハンセン病とは」、「ハンセン病療養所の教育から」、「見聞録」、「これからの課題」から構成されており、いずれも授業実践を行ううえでの基礎的な学習資料となっている。

他にも、「らい予防法」廃止や国家賠償訴訟判決以降、主に各都道府県を単位として、人権学習のとりくみの一環で出身県の入所者の話を聞く催しなどが頻繁に行われるようになってきた。各自治体の教育委員会による人権啓発学習資料作成も進んでいる。このように、現在、ハンセン病の理解を広めようということでは、全国的な動きが広まっている。しかし、これまでの歴史的事実やその経緯・背景、自治体としての歴史責任等を見つめなおさないまま、「人権学習」という枠のなかに押し込めただけの啓発のあり方は、再考されるべき課題を多くかかえている。一時的な学習ブームではない教育の構築が求められている。

六 おわりに

日本の教育学は、ハンセン病にかかわる子どもと教育の問題をどう受けとめてきたのだろうか。国が強制収容・終生隔離政策を行ってきたこと、それによって一般の国民もハンセン病患者やそれに関係する人々（家族、病院関係者等）と「隔絶」されてきたこと、そうしたハンセン病患者を隔離するという政策と日本の教育学も無縁ではなかった。それは、「日本の教育学もまたハンセン病患者・回復者とその家族の深い苦悩と人間としての要求から引き離され、ハンセン病療養所入所者たちの教育と人権の問題に無知・無関心にされ、国の誤ったハンセン病政策を容認・助長してこなかったか。子ども期に固有な「発達と学習の権利」の剥奪をはじめとする国によるハンセン病患者・回復者の人権の蹂躪に対する問題意識の欠落は、とりも直さず教育学研究における人権感覚の脆弱さの反映ではないのか」（清水寛：2002）という問題に行き着く。

1956年のローマ宣言（ハンセン病患者の保護及び社会復帰に関する国際会議での決議）では、「児童たちは（中略）予防施設への入所は（中略）絶対に必要な場合にのみこの手段が採られるべきである」と述べられていたが、そうした国際社会のながれは、少なくとも日本国内には浸透していなかった。

療養所における「教育」の取り組みと、そこでの子どもたちの「学び」の実態、共学拒否という学習権の剥奪などの問題の検討を通して痛感されることは、「ハンセン病にかかわる子どもたち」への教育政策や教育実践、一般社会における人権教育等の教育実践、さらには教育学や教育運動のなかに、「ハンセン病にかかわる子どもたち」についての認識がほとんど皆無で、ほとんど見過ごされ置き去りにされてきたということである。国の誤った強制隔離政策の影響がそれだけ大きかったということであろう。だが、それが、ハンセン病への差別・偏見を助長、放任することに与り、よって子どもたちの人権を大きく侵害することになったのは疑いのない事実であろう。教育行政も不作為の責任を免れがたい。

【引用・参考文献】

池内謙次郎「長島愛生園に半世紀を生きて」（日本特殊教育学界第38回大会自主シンポジウム発表資料、2000年9月）

内田守『熊本県社会事業史稿』1965年

江藤安純「龍田寮児童の黒髪校通学問題について」（熊本県教職員組合編『熊本教育』第7巻第5号、1954年5月）

岡山県立邑久高等学校新良田教室閉校記念事業実行委員会編集・発行『新良田閉校記念誌』1987年
熊本日日新聞社編『検証・ハンセン病史』河出書房新社、2004年

財団法人藤楓協会編『創立三十周年誌』1983年

篠崎恵昭・清水寛「国立療養所多磨全生園のハンセン病児童・生徒の文集の検討—文集『呼子鳥』にみる精神生活の深層—」（『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』第47巻第2号、1998年）

第十三 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(2)

篠崎恵昭・清水寛「国立療養所長島愛生園のハンセン病児の精神生活の深層—“愛生人”構想からみた『望ヶ丘の子供たち』(1941年)・『愛生』誌の検討—」(『埼玉大学紀要教育学部(人文・社会科学)』第50巻第1号、2001年)

清水寛「日本ハンセン病児問題史研究〔I〕—研究の課題と『日本ハンセン病児問題史年表(第1次案)』」(『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』第48巻第1号、1999年)

下田佐重『東村山町教育の歩み』東村山町教育の歩み刊行協賛会、1962年

鈴木敏子『らい学級の記録—えせヒューマニズムとのたたかい—』明治図書、1963年

全国ハンセン氏病患者協議会編『全患協運動史』一光社、1977年

全国ハンセン病療養所入所者協議会編『復権への日月』光陽出版社、2001年

多磨全生園患者自治会編『俱会一処』一光社、1979年

長島愛生園入園者自治会編『隔絶の里程』日本文教出版、1982年

丹羽弘子「ハンセン病療養所入所者にとって唯一の高等学校の歴史」(日本特殊教育学会第38回大会自主シンポジウム発表資料、2000年9月)

延和聰「ハンセン病療養所の教育から」(『ハンセン病をどう教えるか』編集委員会編『ハンセン病をどう教えるか』解放出版社、2003年)

服部正「ハンセン病と保育—日本保育史の落丁—」待井和江先生古希記念論文集編集委員会編『待井和江先生古希記念論文集』全国社会福祉協議会、1988年

東村山市史編さん委員会編『東村山市史2 通史編下巻』東村山市、2003年

藤田真一編著『証言・日本人の過ち—ハンセン病を生きて』人間と歴史社、1996年

藤野豊「解説」(『近現代日本ハンセン病問題資料集成 戦後編第5巻』不二出版、2003年)

藤本フサコ『忘れえぬ子どもたち』不知火書房、1997年

みやこ・あんなの会編『戦争を乗り越えて—宮古南静園からの証言—』、2000年